広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第52号　2003　369－378

トマス・ホワイソーン再考

― 16世紀後半イングランドにおける音楽教育の視点から ―

能登原　由　美

（2003年９月30日受理）

Thomas Whythorne Revisited:
From the Perspective of Music Education in Late 16th -Century England

Yumi Notohara

This paper resituates Thomas Whythorne in the music history of England. Whythorne was unknown even at his period, although he had published his music twice. Sadly enough, his music had been estimated to be 'second-class', until when a part of his music was transcribed and published in 1927. Since then, his music has been re-evaluated in the flourishing of secular songs in late 16th century England. The author of this paper would reveal that his significance was not only in that point, but also in the music education of that period. For this purpose, it would be unveiled the educative features of his second music book, *Duos, or Songs for Two Voyces* (1590).

key words: Thomas Whythorne, Music Education, 16th -Century England
キーワード：トマス・ホワイソーン，音楽教育，16世紀イングランド

序

16世紀のイングランドで活躍したトマス・ホワイソーン（Thomas Whythorne, 1528-96）は，上流家庭の個人音楽教師として生計を立てながら詩や音楽の創作にもいそしみ，生涯を通じて２点の自作曲集を出版した。1571年に出版された『３，４，５声部のための歌曲集』（*Songs, for Three, Fower and Five Voyces:* 以下，『歌曲集』と略）と1590年に出版された『デュオ，あるいは２声部のための歌曲集』（*Duos, or Songs for Two Voyces:* 以下，『デュオ』と略）である。しかしながら，ホワイソーンは当時のイングランドにおいて無名の作曲家であったと同時に[1]，その後のイングランド音楽史上においてもその評価は低いものであった[2]。こうしたホワイソーンのイングランド音楽史における位置付けが見直され始めるのは20世紀に入ってからのことで，1927年にホワイソーンの作品の一部が校訂出版されたのを契機に従来の彼の評価を再検討する書[3]が現れた。それ以降，ホワイソーンの音楽については，ウィリアム・バード（William Byrd, c 1540-1623）をはじめとする同時代のイングランドの著名な作曲家ほどの洗練は見られないとされながらも，ホワイソーンがバードら若い世代の作曲家の音楽書法に与えた影響は決して小さくなく，16世紀末に到来する世俗歌曲の隆盛に貢献したとして一定の評価が置かれるようになるのである[4]。

このように，ホワイソーンについては，その音楽書法からイングランド音楽史における意義が見出されたわけだが，筆者はホワイソーンが果たした役割はそれだけではないと考える。作曲家としては無名であるが音楽教師として活躍したホワイソーンの存在は，当時のイングランドの上流社会に見られた家庭における音楽教育熱の高まりという背景の中から捉え直す必要がある。そして，音楽教師としての半生についてホワイソーンが書き記した自伝[5]や２点もの自作曲集は，まだほとんど明らかにされていない16世紀後半イングランドの音楽教育の実態を解明する手掛かりともなるであろう。さらに，この音楽教育に対する関心の高まり

が，イングランド音楽史を語る上で欠くことのできないバードやトマス・モーリー（Thomas Morley, 1557/8-1602），ジョン・ダウランド（John Dowland, 1563-1626）といった作曲家の創作に多大な影響を与えたことを考えると，ホワイソーンを音楽教育の観点から捉え直すことは，単に音楽教育史という観点において意義があるばかりではなく，イングランド音楽史においても大きな意味を持つと言えるのである。

以上のことから，本論ではイングランド音楽史におけるホワイソーンの意義を，音楽教育という視点から再考する。具体的には，彼が出版した『デュオ』に音楽教育的な意図が見られることを明らかにすることによって，ホワイソーンが当時の音楽教育の場において果たした役割を示したい。『デュオ』は，子供による歌唱を念頭に作られたことがタイトル・ページに述べられている上，歌詞内容に教訓的なものが多いことから，教育的な意図があったのではないかとこれまでにも指摘されてきた[6]。しかしながら，その教育的意図の有無を具体的に検証する試みは未だ見られないのである。

考察は以下の手順で進める。まず，16世紀後半イングランドの上流層における音楽教育に対する関心の高まりを見ながら，上流家庭の音楽教師として活躍したホワイソーンの立場を位置付ける。次に，『デュオ』出版の背景と意図を，自伝や『デュオ』のタイトル・ページなど，ホワイソーン自らが綴った文章の中から探る。続いて，『デュオ』の特徴が曲集全体の音楽構成にあることを示す。最後に，そうした特徴には教育的配慮がうかがえることを示すことによって，音楽教育者としてのホワイソーンの意義を明らかにしたい。

1．16世紀後半イングランドの家庭における音楽教育と音楽教師ホワイソーンの位置付け

1.1．16世紀後半イングランドの家庭における音楽教育熱の高まり

イタリアの宮廷文化の影響を強く受けていたエリザベス1世の宮廷では，ロンドンで1561年に英訳出版されたバルダッサーレ・カスティリオーネ(Baldassare Castiglione, 1478-1529）の『宮廷人 *Il cortegiano*』（1528）が広まっていた[7]。その中には，「理想的な宮廷人」の条件の一つとして，「楽譜を読んですぐに演奏できる」[8]ことが定義されていた。この文言には，多くの宮廷人が強い感銘を受けたものと思われ，16世紀半ば頃から宮廷を中心に音楽演奏が盛んに行われるようになる。こうした宮廷における音楽演奏の流行は，ジェントルマン階級が成立しつつあった16世紀のイングランドにおいて，ジェントルマン・イデアールとして人文主義的な教養が追求されたことと相俟って，貴族やジェントリなどの上流層の間に音楽教育熱を高まらせる。実際，貴族やジェントリ層が残した支出記録には，16世紀半ば頃から楽器や楽譜の購入に関する記録とともに[9]，音楽教師への支払いに関する言及がみられるようになる。例えば，ウィルビー家の1550年代の支出記録には，当主やその家族にヴァージナルを教えた教師への賃金支払い記録が残されている[10]。また，ルトランド伯爵家の1587年の支出記録には，伯爵令嬢にヴァージナルを教えたオルガニストへの賃金支払い記録がみられるのである[11]。

他方，16世紀後半になると，演奏に関する手引書の類が出版され始める。例えば，リュート演奏に関する手引書は1568年に最初に出版されたのを皮切りに，16世紀末までに計３点出版されている[12]。この数値は大変少ないように感じられるが，イングランドで楽譜自体の出版活動が活発になるのは1588年以降のことで[13]，それ以前は数年に１点の楽譜しか出版されない程度であったから[14]，決して少ないとは言えない。そして，当時，１度に印刷される楽譜の数は通常500部から1,000部であったことを考えると[15]，リュート演奏を習得する人々の数は決して侮れないのである。同様に，視唱に関する手引書[16]，また17世紀になると作曲に関する手引書も次々と出版され始める[17]。いずれも，職業音楽家だけではなく音楽愛好家をも対象としていたことは，これらの書が手写本ではなく「印刷出版された」という事実から明らかであろう。

このように，16世紀後半のイングランドでは上流層の間で，音楽教育に対する関心の高まりが広まっていた。彼らは，家庭で音楽教師を雇ったり，あるいは音楽に関する手引書などを購入したりすることによって，音楽の演奏技術を習得しようとしたものとみられる。さらに重要なのは，こうした音楽習得に対する関心の高まりは，上流層の子女に対する音楽教育熱を導いたということである。この事実は，先に挙げたルトランド伯爵家の記録をはじめ，様々な上流家庭の支出記録からうかがえる。また，ホワイソーンは自伝の中で，「土地所有者[つまり貴族など上流層の人々]の多くは，彼らの子供たちにプリック・ソングや楽器演奏を教えるための教師を雇っている。」[18]と述べ，当時，貴族やジェントリの間に，子供に音楽技術を習得させることが広まっていたことを明らかにしているのである。

1.2．音楽教師ホワイソーンの経歴

ホワイソーンは，こうした上流家庭における音楽教

育への関心の高まりから大きな恩恵を被ったと言える。何故なら，ホワイソーンは少なくともその前半生において，こうした家庭の子女の音楽教師となることによって生計を立てることができたからである。

自伝によれば，ホワイソーンは10歳の頃から6年間音楽学校で学んだ後，グラマー・スクールに進んだ[19]。しかし1年もしないうちに彼の後見人であった叔父が死亡したため，宮廷に出入りしていたジョン・ヘイウッド（John Heywood, 1497?-1578?）の書生となった[20]。同時に，音楽にも造詣の深かったヘイウッドからヴァージナルとリュートの手ほどきを受け，数年以内には自らが音楽教師として生計を立てるようになった[21]。

こうして，ホワイソーンの音楽教師としての長い経歴が始まるが，自伝自体は，彼の生徒であった貴族の令嬢や夫人，未亡人などとの恋愛沙汰が中心であるため，ここから彼が行った音楽教育の全容を解明することはできない。しかし，彼が，ロンドンを中心に時にはケンブリッジでも音楽の生徒を持っていたこと，住み込み型の音楽教師ではなく通いの音楽教師で，時には複数の生徒を同時に持っていたことなどがわかる。また，各家庭に奉仕した期間は半年から長くても2，3年であったとみられる。つまり，ホワイソーンは，特定の貴族の専属音楽家兼音楽教師ではなく，独立して自由に様々な生徒を受け持つ音楽教師として生計を立てていたと言える。そのために彼の生活は不安定なものであったようで，自伝の中にはこのような音楽教師としての生活に対する不満を述べた箇所もみられる。彼は，「…生計を立てるための様々な方法を経験して，音楽教師という職業ではいかに何らの保証も安定も得られないかということを感じるに至った。私はその後，他の誰のためでもなく，［音楽家としての］職業に従事しようと思った。」と述べるのである[22]。

このように，ホワイソーンは上流家庭の個人音楽教師としての生活では飽き足らず，その結果，「最も短い時間で私自身が多くの人々に知れ渡るように」[23] 1571年に『歌曲集』を出版する。自伝の中でも明らかにされるようにこの曲集の売れ行きは芳しくなかったが[24]，この出版直後に彼はカンタベリー大主教の礼拝堂音楽監督（Master of Music）の職を得ており[25]，結局，ホワイソーンは音楽教師よりも安定した職業を得ることに成功したと言える。ここでの職務がどのようなものであったのかについて詳細は不明だが，当時のイングランドにおいて教会や礼拝堂の音楽監督は，通常聖歌隊の指導も行っていたことから[26]，ホワイソーンが引き続き音楽教育活動を行っていた可能性は高い。無論，その現場は家庭から礼拝堂へ，すなわち教育の対象はアマチュアの音楽愛好家ではなく職業として音楽を実践するプロの音楽家であるという点で大きく変化した。しかし，子供に対する音楽教育という点など，ホワイソーンのそれまでの音楽教師としての長い経歴が多分に生かされたことは間違いないだろう。

その後，カンタベリー大主教は1575年に死去し[27]，自伝もその時点で終了しているため，その後のホワイソーンの足跡についてはわからない。しかし後述するように，ホワイソーンは1590年に出版する『デュオ』の構想をこの音楽監督就任直後から持っていた。それでは次に，『デュオ』出版の背景・意図を探ってみよう。

2．『デュオ』出版の背景・意図

2.1. 海外の影響

ホワイソーンは，『デュオ』の献呈文において2声部作品集を出版する理由を以下のように述べている。

> 我々の国では2声部のための音楽を出版した者はまだ誰もいません(諸外国ではあちこちで様々な人々が行っているのですが)。［しかし］ロンドン市やその近く，あるいはこの王国内のその他の都市や街に住む音楽の愛好家たちのように，2声部以上の編成の歌を歌えるような集いが身近にあるような人々ばかりではなく，それらの都市や街から遠く離れた地方に住む愛好家たちのように，2声部の編成しか歌えないような集いしか持てない人々が，こうした作品［2声部のための音楽］の出版を心待ちにしていることを私は知っているのです[28]。
>
> （傍点は能登原）

傍点部からも推測されるように，ホワイソーンが『デュオ』を出版するに至った背景には，外国見聞の影響があった。1570年代半ばに書かれたとみられる彼の自伝によると，ホワイソーンは1550年代前半に西ヨーロッパ諸国を遍歴している[29]。この道中では，とりわけイタリアにおいてアマチュア音楽家による演奏活動が活発であったことに驚愕したようであった。というのも彼は，後に自伝の中で諸外国における音楽活動状況を再び取り上げるがその中で，「主にイタリアでは，…（中略）…ある程度の地位を持つ人々の大半は，家の中に2，3，4，5，6，7，または8声部やそれ以上の声部のための歌曲集や器楽曲集を備えている」ことを強調しているのである[30]。そして，これを受けるかのように同じ自伝においてホワイソーンは，2～7声部の作品を今後創作するという計画を語っているが，中でも2声部作品を第一に掲げ，「40曲のデュオ

あるいは2声部の歌曲を作る」と明言しているのである[31]。

2.2. 子供による歌唱を想定した編纂

『デュオ』のタイトル・ページには，曲集のタイトル，作曲者の名前に引き続いて次のような説明文が印刷されている。

> これらのうち，幾つか[の曲]は簡素で，歌や楽器で演奏するのに容易で，これらの類のものは，歌であれ楽器演奏であれ初心者のために作られました。そして残りのデュオは，より完璧な歌唱や楽器演奏ができる人のために作られました。全体は3つの部分に分けられています。すなわち，最初の曲で始まる1番目の部分は，大人と子供の歌唱のため，あるいはこれらの音域に合う声や楽器のために作られました。23曲目から始まる2番目の部分は，2人の子供による歌唱のために作られました。またこれらの曲は2つのトレブル・コルネット，あるいはこれらの音域に合う声や楽器で演奏するのにも適しています。そして38曲目から始まる3番目の部分は，多様な音域を持つ歌曲（いずれも2声部のカノン）で，それゆえ適宜，声あるいは楽器のために用いられます[32]。

このように，ホワイソーンは，この曲集に含まれる曲の幾つかが「初心者（yong beginners）」のために作られたものであることを最初に明確に述べている。さらに，曲集の3つの部分のうち2つの部分が，「子供による歌唱」を想定していることを明らかにしている。実は，16世紀後半のイングランドで出版された曲集の中で，「初心者」や「子供」による歌唱や楽器演奏を想定していることが明言されているものはほとんどない。タイトル・ページのみならず，献呈文や読者への書簡などを含めても，「初心者」という言葉が表れる曲集は，この『デュオ』を除くとバードの『くさぐさの歌』（*Songs of Sundrie Natures,* 1589）のみである[33]。「子供」を想定していることを謳った曲集にいたっては，『デュオ』を除くと皆無である[34]。従って，ホワイソーンが『デュオ』のタイトル・ページにおいて「初心者」や「子供」といった言葉を用いたのは単に慣習によるとは言えない。むしろ，曲集の作成にあたってこうした歌唱や楽器演奏の経験の浅い人々を想定していたゆえに，ホワイソーンが意識的に用いたものであると考えられる。

従って，『デュオ』は「初心者」や「子供」を意識して編纂されたものと考えられるが，とりわけホワイソーンが意識していたのは「子供」による演奏だったのではないだろうか。何故なら，彼が選択した「2声部」という演奏形態は，当時のヨーロッパでは，主に子供の教育を目的として作られるものであった。特にドイツでは，子供に聖書と音楽の双方を教育する手段としてルター派の学校で奨励されていた[35]。『デュオ』の出版にあたってホワイソーンの外国見聞が影響していることについてはすでに述べたが，ホワイソーンはその道中でドイツにも立ち寄っており，彼がこうしたドイツにおける2声部作品の位置付けとその人気ぶりを目の当たりにした可能性は大いに考えられる。さらに，ホワイソーンが自伝の中で『デュオ』出版の構想を語ったのは，カンタベリー大主教の礼拝堂音楽監督就任直後のことであった。すなわち，『デュオ』の構想は，聖歌隊の教育－その中には子供の歌唱指導も含まれるだろう－を担った音楽監督ホワイソーンの立場に大きく関連していたと考えられるのである。

このように，『デュオ』には主に「子供」を想定した教育的意図があったものと思われるが，次に述べるように，こうした意図は曲集の内容にも表れている。まずは『デュオ』の特徴をみてみよう。

3．『デュオ』の特徴

『デュオ』の特徴は，その截然とした曲集構成にあると言える。こうした曲集の構成は，ホワイソーンが編纂に際して特に注意を払った点であったと思われる。

3.1. 曲集の構成に対するホワイソーンの意識

先に引用したタイトル・ページにもあるように，『デュオ』は3つの部分から構成されている。しかし，ジョブリングによると，曲集全体は歌詞や音楽的特徴から明確に4つの部分に分けられる（表参照）[36]。この分類では，ホワイソーンが指定した第1の部分がさらに2つに分類されるが，残る2つの部分はホワイソーンの分類と一致する。より具体的にみていくと，まず，1曲目から12曲目にあたる第1部の前半部分（以後，1a部と記載）は，曲全体を通して歌詞付けが行われ，詩編119番の第1節から第48節までの4節ごとが順に歌詞として用いられている。また，いずれも調号を持たない。次に，13曲目から22曲目にあたる第1部の後半部分（以後，1b部と記載）は，曲の冒頭にのみ歌詞が付され，いずれも歌詞の出典が不明である。そして，ホワイソーンが第2の部分として分類した23曲目から37曲目までは，やはり曲の冒頭にのみ歌詞が付されているが，これらのテクストはホワイソーンの自伝に残された彼自身の作による詩であることをジョブリ

表.『デュオ』の分類と各部の特徴

ホワイソーンによる分類		歌詞の第1行	歌詞の出典	ジョブリングによる分類と各部の特徴	音域 Cantus 最低音と最高音*	音域 Cantus 音程	音域 Bassus 最低音と最高音	音域 Bassus 音程
第1部 大人と子供の歌唱のため	1	Blessed are those that are vndefeled.	詩編119番 1-4		a-c''	10	c-f'	11
	2	O that my wayes were made so direct.	5-9		g-c''	11	c-f'	11
	3	Wherwithall shall a yong man clense his way.	10-12		c'-e''	10	c-e'	10
	4	With my lips haue I bene telling.	13-16	第1a部	c'-e''	10	c-f'	11
	5	O doe well vnto thy seruant.	17-20		b-d''	10	c-f'	11
	6	Thou hast rebuked the proud.	21-24	曲を通して歌詞	b-e''	11	c-f'	11
	7	My soule cleaueth to the dust.	25-28	付けがなされる	b-d''	10	d-d'	8
	8	Take from mee the way of lying.	29-32	歌詞は	a-c''	10	A-c'	10
	9	Teach me O Lord the way of thy statutes.	33-36	詩編119番の	b-e''	11	c-e'	10
	10	O tune away mine eyes.	37-40	1～48節	g-a'	9	A-d'	11
	11	Let thy louing mercie come also vnto mee.	41-44		a-c''	10	A-c'	10
	12	And I will walke at libertie.	45-48		a-c''	10	A-c'	10
				第1a部全体の音域	g-e''	13	A-f'	13
				第1a部の音域の平均音程		11.25		11.4
	13	To God all honour giue.			g-c''	11	A-d'	11
	14	Thy Parents reuerence.			a-c''	10	A-d'	11
	15	Loue thou thy neighbour.		第1b部	g-c''	11	A-d'	11
	16	Thy Master feare.			b-e''	11	c-f'	11
	17	Be faithfull to thy friend.	不明	歌詞付けは歌詞の	b-e''	11	c-e'	10
	18	In counsell be thou close.		始まりのみ	c'-d''	9	c-f'	11
	19	Accompany the good.			d'-a''	12	c-f'	11
	20	The ill doe thou flye.			b-e''	11	c-e'	10
	21	Preace not to heare others secrets.			b-e''	11	c-f'	11
	22	O lux beata trinitas.	**		b-e''	11	c-f'	11
				第1b部全体の音域	g-e''	13	A-f'	13
				第1b部の音域の平均音程		12.1		12.1
第2部 二人の子供の歌唱のため	23	To vse good for ill.			g-c''	11	g-c''	11
	24	As hautie pride oppreseth loue.			b^b-d''	10	g-b^b'	10
	25	In ouercomming appetite.			c'-d''	9	a-d''	11
	26	Who speakes thee fayre.		第2部	c'-d''	9	g-c''	11
	27	Of all ye things that we finde best.			a-c''	10	g-g'	8
	28	When speeches to much and out of frame.			c'-d''	9	b^b-d''	10
	29	If thou wouldst knowthe swiftest thing.		歌詞付けは歌詞	a-d''	11	g-c''	11
	30	No exercise can haue.		の始まりのみ	b-d''	10	g-c''	11
	31	Though many iudge and giue sentence.	自伝に書か	また1つか2つの	b^b-c''	9	g-c''	11
	32	Of needefull things that oft disgrace.	れた詩より	調号(フラット	b^b-$e^{b''}$	11	b^b-$e^{b''}$	11
	33	To giue counsel to others is rife.		記号)を持つ	c'-$e^{b''}$	10	g-c''	11
	34	Authoritie most doe desier.			b-d''	10	g-a'	9
	35	The great desier to get riches.			b^b-$e^{b''}$	11	b^b-$e^{b''}$	11
	36	Affections strong ye doe moue vs.			g-c''	11	g-c''	11
	37	Who doth not much esteeme of health.			g-c''	11	g-b^b'	10
				第2部全体の音域	g-$e^{b''}$	13	g-$e^{b''}$	13
				第2部の音域の平均音程		11		11.3
第3部 多様な音域をもつ歌曲	38	What makes yong folkes simple in shew.			b^b-c''	9	b^b-c''	9
	39	The minde of man doth change hourely.			d'-f''	10	d-f	10
	40	His mortall lyfe doth lyttle see.	不明		e'-f''	9	e-f	9
	41	For to be borne as infants be.	自伝		c'-e''	10	B-d'	10
	42	Lament we shold at childrens birth.	不明	第3部	c'-e''	10	B-d'	10
	43	The worldlings iudge that man happie.	自伝		b-d''	10	G-b^b	10
	44	But Solon sayd.			c'-d''	9	G-b^b	10
	45	Like as the Byrds that Swalowes hight.		歌詞付けは	c'-d''	9	G-a	9
	46	So sayned friends.		歌詞の始まり	c'-d''	9	G-a	9
	47	This oft is found for to be trew.		のみのカノン	a-c''	10	d-f'	10
	48	The conditions of man doth change.	不明		g-c''	11	c-f'	11
	49	A tirannie not lasting long.			b-d''	10	d-f'	10
	50	Acceptable is nothing more.			b-d''	10	c-f'	11
	51	Two comforts hath the vnhappyman.			b-c''	9	c-f'	11
	52	The other if he to mynde can call.			c'-e''	10	d-f'	10
				第3部全体の音域	g-f''	14	G-c''	18
				第3部の音域の平均音程		10.6		11.1

*b-flat, e-flat については、それぞれ b^b, e^b と示す。
**タイトルがラテン語で、以下の詩は英語。恐らくホワイソーン以外の人に作詞された唯一のもの(Jobling 1978: 106-7)。

ングは明らかにしている[37]。また，いずれも1つか2つの調号を伴っている。最後に，ホワイソーンが第3の部分として分類した38曲目から最後の52曲目までは，曲の冒頭にのみ歌詞が付されたカノンである。これらの15曲のうち，4曲はやはりホワイソーンの自伝に書かれている自作の詩だが，残りの11曲については出自が不明である。

このように，ホワイソーンがタイトル・ページで指定した分類では，想定する演奏者の種類と，各部分の音域の相違が述べられていただけだが，ジョブリングが明らかにした歌詞内容や音楽的特徴においても，各部分ごとに明確な特徴があることがわかる。言い換えれば，ホワイソーンは，単に演奏者や音域に関して共通する作品を集めただけではなく，歌詞内容や調号，形式の点にまで注意を払い，各部分ごとの統一性をはかろうとしていたと思われる。『デュオ』を編纂する際のホワイソーンにとって，その「構成」はとりわけ重要な意味を持っていたことが明らかであろう。

しかしながら，その分類についてはホワイソーンによる3つの分類よりも，ジョブリングが行った4つの分類で考える方がより適切であろう。何故なら，第1部についてはa部とb部の間で単に歌詞の付け方が異なるだけではなく，第1a部については明らかに，一連の作品として作曲されたものと考えられるからである。これは第3部についても当てはまる。まず，第1a部については，すでに述べたように，詩編第119番の歌詞を4節ごとに順次使用している。この詩編は，計178節からなる長大な詩編で，全体は8節ごとに区切られた計22の連によって構成される。ホワイソーンは，1曲に8節ではなく4節だけを当てはめているが，4節ずつ順に当てはめることによって元の詩編の規則性を維持している。ホワイソーンがこの詩編全体に曲を付ける意図があったのかどうかは不明だが，こうした規則性を見る限り，これらの12曲が連作された可能性は高いと言える。次に，第3部については，全てカノン技法を用いた作品である。しかも，15曲のうち，最初の3曲がユニゾンまたはオクターブのカノン，続く4曲目からは2曲ずつが対になり，それぞれ順に，2度[38]，3度，4度，5度，6度，7度のカノンとなっている。つまり，第1部同様，明白な規則性が見られるのである。さらに，曲の長さも第2部までとは大きく異なり，いずれも非常に短い。従って，これらの作品も連作された可能性が高いと言えるだろう。

3.2. 音域の相違から

こうした曲集の構成に対する配慮は，各部分の音域の相違をみても明らかである。タイトル・ページを見る限り，『デュオ』は3つの異なる演奏者を想定しており，それぞれ演奏者に適した音域を持つものと思われる。実際，全曲の音域を調べてみると，各部分を特徴づける相違がみられる。特に，2人の子供を想定した第2部では，バス・パートの音域はソプラノ・パートの音域と全く同じである。これを他のバス・パートの音域と比較すると，第2部のバス・パートの方がほぼ1オクターブ高いことになる。パート譜には「バス」という言葉が用いられているものの，ホワイソーンがタイトル・ページで説明している通り，実際には子供の声の音域が想定されていることが明らかである。

他方，ホワイソーンによると第3部は「多様な音域を持つ」部分である。その説明通り，各部分全体が占める音域を調べると，この第3部の音域が最も広いことがわかる。特に，バス・パートに至っては，第1部，第2部がともに13度であるのに対し，第3部は18度にも及んでいる（表参照）。但し，1つの曲が占める音域の幅については平均すると11度であり，これは他の部分とほとんど変わらない。つまり，1つの曲が持つ音域については第1部，第2部と変わらないが，曲による音域の相違が他の部分より顕著であると言える。

それでは，ジョブリングによって分類された第1a部と第1b部では，音域に違いがあるのだろうか。第1a部と第1b部で音域を調べると，各部分全体が占める音域についてはソプラノ，バス・パート共に全く同じであることがわかる。しかし，1曲の音域の幅の平均については，ソプラノ，バス共に第1a部よりも第1b部の方が広い。すなわち，第1a部ではソプラノが11.25度，バスが11.4度であるのに対し，第1b部では両パートとも12.1度であった。

4.『デュオ』にみられる教育的性格

以上に述べた『デュオ』における構成の重要性は，ホワイソーンがこの曲集に託した教育的側面を表していると考えられる。また，『デュオ』に収められた曲の歌詞内容からもこうした教育的側面はうかがえる。最初に，曲集の構成，続いて歌詞内容について述べたい。

4.1. 曲集の構成にみられる教育的側面

ホワイソーンによって分けられる3つの部分は，その音域，調号，形式，さらにリズムやメロディー・ラインの相違から判断して，歌唱や楽器演奏の技術を習得する上での段階的構成を踏んでいると捉えることができる。

(1) 第1a部

男性と子供のための歌唱を意図した第1部は，まだ

歌唱経験が浅い子供が教師とともに歌っていた可能性があるだろう。とりわけ第1a部は，他の部分とは異なり唯一，曲全体にわたって歌詞付けがなされている部分であるが，その音楽的特徴からこの第1a部が他の部分ほど歌唱や器楽演奏について高い技術を必要としないことがわかる。すなわち，ここでは二分音符を中心にゆるやかに進行する作品が多いが，これは八分音符を中心とした速いパッセージが断続的に続く他の部分ほど高い演奏技術を要しないのである。

(2) 第1b部

第1b部になると，第1a部が持つこうした特徴はみられなくなる。二分音符はほとんどみられなくなり，四分音符や八分音符が多用される。また，時にはオクターブにも及ぶ順次進行を中心とした速いパッセージが頻繁に現れる。第19曲目になると，3度や4度跳躍の反復進行も頻繁に現れる。歌唱にせよ器楽演奏にせよ，八分音符など短い音価を用いた速いパッセージは技術的により難易度が高くなるといえるが，同様に順次進行よりも跳躍進行の方が一般的に演奏が難しい。こうした特徴から，第1b部は第1a部より高度な演奏技術を要すると言えるだろう。

(3) 第2部

ここでは2人の子供による歌唱，あるいはコルネットによる二重奏を想定している。子供の音楽教育を目的に盛んに2声部作品を創作したドイツでは，2声部の作品は大きな編成の曲よりも「同年代の少年たちが正しく歌うことができる」ものとして好んで利用された[39]。この第2部の編成も，こうしたドイツにおける少年向けの2声部作品に対する人気の影響があった可能性が考えられる。しかし，同じ音域の高音部のみによる重唱は，低音部が入ることによって得られる安定性を欠き，歌唱においてはより熟達した技術を要する。その上，第1b部でみられた八分音符の多用や，跳躍進行の反復を取り入れた書法は，第2部になっても変わらない。従って，この第2部は，第1a部の歌唱技術水準を越えた少年たち，あるいは，第1部全体の楽器演奏水準を越えた人々を想定して作曲されたものと思われる。このことは，この第2部全15曲がいずれも1つあるいは2つの調号を持つ曲でより高度な音楽知識や演奏技術を要した事実によっても裏付けられる。

(4) 第3部

第3部になると，再び二分音符が多用されるようになる。ただし，こうした書法が曲全体を通じて支配的であることはなく，曲の中間部や後半部となると八分音符による速いパッセージも登場する。つまり，第1部，第2部の典型的な特徴を折衷した書法といえる。また，すでに述べたように，この第3部は，カノン技法がユニゾン（オクターブ）から7度まで規則的に配列された構成となっている。16世紀のヨーロッパでは，カノンは主に作曲家になるために習得するべき技法として大きな教育的意味を持っていた[40]。従って，ホワイソーンはこの第3部を，第1部，第2部にも増してより高度な音楽教育を施す際の手段として使用したとも考えられる。

4.2. 歌詞内容にみられる教育的側面

歌詞内容を見ても，その教育的性格がうかがえる。すなわち，『デュオ』で用いられている歌詞はいずれも，教訓的，内省的な性格を持つ。まず，第1a部の詩編については，詩編を用いていること自体に宗教的，教訓的な配慮が見出される。しかしそれだけではなく，この詩編自体の内容が神の律法に対する賛辞とそれへの従順を誓ったものであることから，青少年に対する日常生活の規範を訓示したものと捉えることもできるのである。

次に第1b部については，歌詞の出だしのみが記されており，歌詞内容を詳細に分析することはできない。しかし，歌詞の始まりの部分を見ても，その教訓的性格は明白である。例えば，第15曲は「汝の隣人を愛せよ」(Love thou thy neighbour)，第17曲は「汝の友に忠実であれ」(Be faithfull to thy friend) とある。

第2部についても歌詞の始まりの部分のみが書かれているが，これらの歌詞全体はいずれも自伝に残されている。その教訓的性格について若干例を挙げれば，第32曲は，「不名誉ではあるが必要とされるものを，私は次のように列挙する，最初が機知で次に言葉，続いて仲間で最後に酒」[41]とあり，第35曲は，「金持ちになることへの野望，多くのものが抱く虚栄，所有したいと探し求める愛情，人を狂わせる激しい怒り，［これらは］賢い輩をまぬけにし，多くの愚か者のかんぬきをはずす」[42]とある。他の歌詞についてもこうした性格はほとんど変わらない。

最後に，第3部については，歌詞の始まりの部分だけが記され，15曲のうち4曲のみが自伝に残されている。自伝に残された4曲のうち，例えば第43曲は，「人が幸せであるということの俗物的根拠は，意のままに俗物的な富を持ち，高く尊ばれ，それゆえに自らの望みをかなえることができるということである。しかし，ソロンは言う，幸せに死すまで何人も幸せではないと。」[43]とあり，やはりその教訓的性格は変わらない。

結

このように，『デュオ』は，歌唱（演奏）技術習得過程を捉えた段階的な構成を有するとともに，教訓的な内容の歌詞ばかりを集めていることがわかる。こうした特徴は，『デュオ』の教育的な側面を表すと言えるだろう。そして，この教育的な側面は，ホワイソーンがタイトル・ページで述べていたように，子供を想定したものだったのではないかと思われる。それは，音楽教師ホワイソーンが直面した，上流家庭における子女の音楽教育と礼拝堂の聖歌隊指導によって生み出されたものと考えられる。

こうした『デュオ』の編纂内容を通じて，当時のイングランドにおける音楽教育に対してホワイソーンが果たした役割を，以下のように指摘することができる。すなわち，ホワイソーンは16世紀後半のイングランドにおいて唯一，子女の音楽教育に熱心な人々のニーズに応じた歌曲集を出版したということである。すでに述べたように，子女に対する音楽教育熱の高まっていた当時，「子供」を念頭においた教則本的な歌曲集が求められていたことは間違いない。しかしながら，「子供」を想定した歌曲集は16世紀後半のイングランドではこの『デュオ』以外には見当たらないのである。子供のための歌曲集をいち早く創作・出版したホワイソーンの功績は，音楽教育への関心が高まった当時のイングランドにおいても，またイングランドの音楽教育史全体においても看過できない点であろう。

無論，イングランド音楽史におけるホワイソーンの意義をより明確に示すためには，『デュオ』がどのくらい当時の社会で受け入れられ，当時の音楽教育においてどれほどの影響力を有したかを明らかにすることが必要である。しかしながら，これまでの研究のように，作品の美的価値を通じてのみ作曲家を位置付ける方法では，当時の音楽文化の中でホワイソーンが果たした役割を見落とすことになりかねない。本論において，ホワイソーンを音楽愛好家による音楽教育熱の高まりというコンテクストの中で捉え直したことによって，彼の作品の新たな意義が浮かび上がってきたとともに，ホワイソーンのイングランド音楽史における従来の位置付けを見直す必要が生じたと言えるのである。

【注】

1）トマス・モーリーが編纂した『オリアナの勝利』（*Triumphes of Oriana,* 1601）をはじめ，当時編纂された歌曲選集のいずれにおいても，ホワイソーンの曲は取り上げられていない。

2）ホワイソーンに関する評価の変遷をまとめたMcQuillan（1981：1-17）によると，18世紀にイングランド音楽史をまとめた歴史家Charles Burney が，「詩も音楽も洗練されていない」と酷評したことによって，イングランド音楽史におけるホワイソーンの不当な位置付けが決定付けられた。こうした評価は20世紀に入るまで続く。

3）Peter Warlock, *Thomas Whythorne: an Unknown Elizabethan Composer* (London, 1927)

4）例えば，Fellowes(1948: 34-5) は，ホワイソーンが「イングランドのマドリガルの発展に重要な位置を占める」と明言した上で，彼の作品の幾つかを紹介している。その後，20世紀後半に行われた研究 (Jobling 1978); (MacQuillan 1981); (Teo 1990); (Carter 1995) においてもホワイソーンのこうした位置付けはほとんど変わっていない。

5）この自伝は1955年になって発見され，その後1962年に Osborn によって出版された。Osborn (1962: xiii) によれば，自伝は1576年頃書かれたものとみられる。

6）Jobling (1978: 111-2)

7）Cf. Monson (1989: 333); Price (1981: 7)

8）『カスティリオーネ宮廷人』（1987：159）

9）Woodfill（1969：252-79）に掲載された，貴族やジェントリ家庭における音楽に関する支出記録を参照。

10）Woodfill (1969: 274)

11）Woodfill (1969: 269)

12）Adrien Le Roy, *A Briefe and Easye Instruction to Learne the Tableture... Englished by J. Alford Londenor* (1568); idem, *A Briefe and Plaine* Instrcution to Set All Musicke of Eight Divers Tunes in Tableture for the Lute (1574); William Barley, *A New Booke of Tabliture, Containing Sundrie Easie and Familiar Instructions* (1596)

13）ここでいう「楽譜」には，理論書，宗教書，教則本の類は含まれない。また，16世紀後半イングランドにおける楽譜出版活動については，拙論（2003）参照。

14）1550年から，楽譜出版活動が活発化する88年より前の38年間に出版された楽譜の数は，僅かに6点である（筆者調べによる）。

15）上掲拙論，24-25頁。

16）William Bathe, *A Briefe Introduction to the True Art of Musicke* (1584); idem, *A Brief Introduction to the Skill of Song: concerning the practice* (c. 1587-90); また Thomas Morley, *Plaine & Easie Introduction to*

Practicall Musicke (1597) の中にも視唱技術の習得に関する部分が含まれている。

17) Cf. Ruff (1970)

18) Osborn (1962: 205)

19) 自伝によれば，Oxford, Magdalen College である。Osborn (1962: 3-5.)

20) Osborn (1962: 5)

21) Osborn (1962: 6, 10)

22) Osborn (1962: 140)

23) *Ibid.*

24) Osborn (1962: 180)

25) Osborn (1962: 208) また，Osborn の注釈 (1962: 208n) によれば，ホワイソーンがこの職に就任した正式な年月日は記録されていないが，恐らく1571年に『歌曲集』を出版した直後ではないかと考えられる。

26) Woodfill (1950: 102-3)

27) Osborn (1962: 228) によれば，大主教は同年5月に死去している。

28) Whythorne (1590: Dedication)

29) ホワイソーンは自伝の中で，フランドル地方，ドイツ，イタリア，フランスを巡ったことについて記しているOsborn (1962: 49-58)。その時期については，MacQillan (1981: 2-3)

30) Osborn (1962: 206)

31) Osborn (1962: 211)

32) Whythorne (1590: Title Page)

33) 筆者調べによる。バードの『くさぐさの歌』では，読者への書簡の中で「初心者 (yong practicioner)」をも想定していることが記されている。Byrd, (1589)

34) 筆者調べによる。

35) Bellingham (2001: 552-3)

36) Jobling (1978: 103)

37) Jobling (1978: 106-8)

38) 厳密には9度のカノンである。

39) Bellingham (2001: 552)

40) Mann and Wilson (2001)

41) "Of needful things that oft disgrace | Be these following, as I have placed. | The wit is first, words next take place, | Then company, and drink is last." (Osborn 1962: 213)

42) "The great desire to get riches | And vainglory that many have; | The love that some seek to possess; | A fury great that makes some rave; | Do make wise folks for to seem dolts, | And to shoot forth many fool's bolts." (Osborn 1962: 213)

43) "The worldlings judge that man happy | That worldly wealth hath at his will; | And that honour doth set on high, | Wereby he may his will fulfill. | But Solon said, none was happy | Till happily that he did die." (Osborn 1962: 27)

【引用・参考文献】

Bellingham, Bruce A. 2001. "Bicinium," *New Grove Dictionary of Music and Musicians* 2nd ed. vol. 3: 552-3.

Carter, Tim. 1995. "Secular Vocal Music," in *Music in Britain The Sixteenth Century.* Ed. Roger Bray. 147-209. London: Blackwell.

Fellowes, E. H. 1948. *The English Madrigal Composer.* London: Oxford Univ. P.

Jobling, Joan. 1978. "A Critical Study and Partial Transcription of the Two Published Collections of Thomas Whythorne," master's thesis, University of Sheffield.

Mann, Alfred and Wilson J. Kenneth. 2001. "Canon," *New Grove Dictionary of Music and Musicians* 2nd ed. vol. 5: 1-6.

McQuillan, Robert. 1981. "Thomas Whythorne Songs For Three, Four and Five Voices (1571): An Edition and Commentary," master's thesis, The Queen's University Belfast.

Monson, Craig. 1989. "Elizabethan London," in *The Renaissance: From the 1470s to the End of the 16th century. Man & Music 2.* Ed. Iain Fenlon. 304-40. London: Macmillan P.

能登原由美 2003「16世紀後半のイングランドにおける楽譜出版－創作における出版の意義－」(広島大学大学院博士論文)

Osborn, Jams M. ed. 1962. *The Autobiography of Thomas Whythorne.* London: Oxford Univ. P.

Price, D. C. 1976. "The Elizabethan Household and its Musical Education," *Consort* 32: 193-9.

Price, D. C. 1981. *Patrons and Musicians of the English Renaissance.* Cambridge: Cambridge University P.

Ruff, Lillian M. 1970. "The Social Significance of the 17th Century English Music Treatises," *The Consort* 26: 412-422.

清水純一，岩倉具忠，天野恵訳注 1987 『カスティリオーネ宮廷人』東海大学出版会

Teo, Kian Seng. 1990. *"Thomas Whythorne's* Songs for Three, Four and Five Voices (1571)," *The Music Review* 51: 11-24.

Woodfill, Walter L. 1950. "Education of Professional Musicians in Elizabethan England," *Medievalia et Humanistia* 6: 101-8.

Woodfill, Walter L. 1969. *Musicians in English Society: from Elizabeth to Charles I.* New York: Da Capo P.

（楽譜資料）

Whythorne, Thomas. 1571. *Songs, for Three, Fower and Fyve Voyces.* (British Library, k. 4. c. 2.)

Whythorne, Thomas. 1590. *Duos, or Songs For Two Voyces.* (British Library, k. 4. c. 3.)

（主任指導教官　増山賢治）